

e-dream-s 通信

No. 111 発行：2010年6月13日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

今月号は、先月末に大阪で行なわれた理事会特集です。参加者からの熱い声をお届けします。どうぞお楽しみ下さい。

目 次

1. 第34回理事会を終えて	中川 房代	p. 2
2. e-dream-s は変わります	辻 荘一	p. 4
3. United in Diversity:欧州連合を考える	井川 好二	p. 6
4. e-dream-s board meeting	Brian Nuspliger	p. 12
5. To e-dream-s members	Sokhom Leang	p. 12
6. Dream is coming true...	Sopha Saran	p. 13
7. Meeting in Osaka	Akhara Ung	p. 13
8. 曇りのち晴れ： わくわく理事会	山田 昌子	p. 14
9. “e-dream-s Standard” (理事会を終えて)	藤澤 俊之	p. 16
10. 多様性を受け入れること	塚本 美紀	p. 18



理事会2日目終了時の参加者記念撮影

(後列右から井川顧問、飯田理事、Brian Nuspligarさん、Sokhomさん、中川副代表理事、山田理事、辻代表理事、藤澤理事、前列右から仙崎さん、岡田理事、塚本理事、Sophaさん、Akharaさん、道面理事)

第 34 回理事会を終えて

中 川 房 代

5 月 29 日～30 日、大阪で第 34 回理事会を開催しました。

今回の理事会の主要な議題は、カンボジア・プロジェクト開始に向けての論議を進めることであり、そのため、日本に留学中のカンボジアの英語教師 Sokhom さん、Sopha さん、Akhara さん、また ECAP 以来 e-dream-s の活動や理事会にも参加してくださっている Brian さんにも論議に加わっていただきました。

2009 年度事業報告（総括）の部では、昨夏の「カンボジアツアー2009」の成功、そして「カンボジア英語教育支援プロジェクト」に関しては、秋の 2 つのカンボジア留学生団体とのミーティングを経て今後の協力関係の一步が築けたことが成果として確認されました。2 月の「CamTESOL 2010 ツアー」では、3 年連続で発表を行い、ACROSS の音声訓練の価値とその先進性を示し、これまでのコンタクトパースンとの繋がりを進展させるなど、大きな役割を果たして来ました。

ホームページについては、定期的に内容の更新をしていくこと、加えて今後のカンボジア・プロジェクトの展開を考える時、英語版の必要性・重要性が強調されました。e-dream-s 通信については、よりわかりやすく伝える工夫をしていくことが担当者から報告されました。

2010 年度方針「カンボジア・プロジェクト」については、まず 2 つのプレゼンテーションから始めました。井川顧問からは、各種団体、NPO・NGO などの行っているカンボジアでの様々な取り組みを映像で紹介していただき、今回初参加の Akhara さん（広島在住）は、カンボジアの教育について、また自身の教師、ラジオ DJ の経験についてお話してくださいました。

その後、カンボジア・プロジェクトを中心に論議をしました。1 月の理事会での提案「英語教育奨学金プロジェクト」は、まだ具体的にカンボジア側と話を進めることができず、残念ながらプロジェクトとして進んでいないのが現状です。今理事会では、カンボジア人の 3 名から新たな提案がありました。それは、週末に郊外の学校の教室を借りて、希望する生徒を対象に、英語の授業をするプロジェクトができるのではないかとということです。教える教師も、カンボジアのコンタクトパースンにお願いすれば確保できる見込みがある、ということです。

具体的には、今後、今回参加してくれた上の 3 名、カンボジアのコンタクトパースンや関係者と相談しながらこの「Weekend English Class Project（仮称）」を策定していくことになりました。「英語奨学金プロジェクト」も「Weekend English Class Project（仮称）」の中で実施することも可能だと思われます。

このプロジェクトは、私たちがカンボジア（の人々）に何かをしてあげる、という一方的なものではなく、日本（の人々）ができること、カンボジア（の人々）がすべきこと、の役割分担を明確にしながら、アメリカ（の人々）や韓国（の人々）、他の国（の人々）とも一緒になってこのプロジェクトを担っていく、そんなコラボレーション型、協働型のプロジェクトにしていきたいと考えています。

夏の総会に向けて、この方針に沿って、早急に策定作業を進めていきたいと考えています。皆様のご意見をお寄せください。お願いします。

理事会の議案（抜粋）

- (1) 議案 1 : 2009 年度（2009 年 6 月 1 日から 2010 年 5 月 31 日まで）事業報告承認の件：
 - ・ 「カンボジアツアー2009」
 - ・ 「CamTESOL2010 ツアー」
 - ・ 「カンボジア英語教育支援プロジェクト（SEEC: Supporting English Education in Cambodia）」
 - ・ e-dream-s ホームページ
 - ・ e-dream-s 通信
- (2) 議案 2 : 2009 年度収支決算の報告
- (3) 議案 3 : 2010 年度（2010 年 6 月 1 日から 2011 年 5 月 31 日まで）事業方針について
 - ・ 「CamTESOL 2011」方針
 - ・ 「カンボジア英語教育支援プロジェクト」
 - ・ 2010 年度収支予算



理事会 1 日目の昼食風景（中華料理店で）（以下敬称略）

（左奥から：河野、岡田、Sopha、右奥から：井川、道面、Akhara、Sokhom、塚本）

e-dream-s は変わります

辻 莊一

ACROSS がその活動の一部として行ってきた、英語教師の社会参加をさらに充実させるため法人資格を取得したのが 2000 年のことです。組織として 20 年以上活動してきたにもかかわらず、公には英語教師の私的なグループに過ぎなかった ACROSS に、公の顔と地位を与えることによって、様々な社会活動がよりスムーズに行われるであろうという意図でした。

以降 10 年あまり @aglance, ECAP, カンボジアプロジェクトなど活動内容はもちろんのこと、理事会・総会の実施、活動報告、収支報告なども認証特定非営利活動法人として形式上もきちんとした活動を行ってきました。

ただ、そのメンバーはほぼ ACROSS のメンバーと重なっており、ACROSS 以外から参加した会員数は限られたものでした。つまり、公的な立場を得て内容上も形式上も立派に活動してきたけれども、その会員構成を見れば、私的なグループであった時とさほど差はない、という状況でした。

もちろん、そのことに問題があるというわけではありません。顔見知りばかりのメンバーでもその活動が立派であればいいのですから。ただ、国際的な活動を継続的行おうとすれば、メンバーのほとんどが日本人の英語教師、しかも大部分が ACROSS 会員という均質なグループでは限界があったのかもしれない。

たとえば現在 ECAP が中断しているのは、韓国の先生方に自ら ECAP を企画運営し続けていこうという人物が現れなかったことが原因の一つではありますが、そのようになってしまった理由の一部はグループの均質性にあったのかもしれない。繰り返し言いますがグループの均質性そのものが悪いわけではありません。ECAP のスムーズな運営に、このグループの均質性がプラスに働いたことは明白です。

さて、現在進行中のカンボジア英語教育支援プロジェクトは、様々なアイデアと強い意欲があったにも関わらずこの 1 年間、大きな動きはありませんでした。先の理事会ではこの動きのないプロジェクトをどうするかということが大きなまた難しい議題でした。それまでは e-dream-s から、こんな援助はどうだ、あんなやり方はどうだと提案し、それについて留学生をはじめとしたカンボジアの人々に意見を求めるという形で検討してきましたが、人とお金を投入して一歩前に踏み出すには決め手を欠いていたのです。

ところが、今回、現地の事情をよく知っている当のプロジェクトの受益者である我々こそがアイデアを出し、積極的に活動すべきであるということで、カンボジアからの理事会参加者 Sokhom さんから、自分たちで英語教育支援の計画をたてるのでそれを検討して欲しいとの提案がありました。

私たちとしては、これには一も二もなく賛成でしたが、さらに、そこまでコミットメントがあるならということで、カンボジアからの理事会への参加者である Sokhom さん, Sopha さん, Akhara さんに加えて、やはり理事会に参加していたアメリカ人 Brian さんにも、e-dream-s の会員になってもらうとい

う方向に話が進みました。さらに、Brianさんと3人のカンボジア人の参加者のひとりには、理事会のメンバーにもなってもらうという方向で話を進めています。

理事会にアメリカ人理事とカンボジア人理事が加わるということは、なにを意味しているのでしょうか。まず一つは、言葉です。理事会の公用語は英語にならざるをえません。ウェブサイトの英語化も必要となりますし、配布物も徐々に英語に変えていかなければならないでしょう。もうひとつは異文化コミュニケーションです。彼らは ACROSS のメンバーでないのはもちろん日本人でさえありませんから、様々な場面で今まではなかった意見の食い違いが出ることも容易に想像がつきます。私たちは今まで以上に自分の意見や考えを明確に述べ、意見をかかわしていかなければなりません。

この二つを乗り越えるのはおそらく簡単かつスムーズというわけには行かないでしょう。しかしいずれは、英語で理事会を行い、アメリカやカンボジアの視点からの意見をきくことや英語で発信することが当たり前のことになるでしょう。

今後私たちは、全員 e-dream-s のメンバーとしてカンボジアのためのプロジェクトを進めていくこととなります。カンボジアでは様々な援助活動が行われていますが、誰かが誰かを助けるという形ではない、日本人もアメリカ人もカンボジア人も一つの団体のメンバーとなって一諸に活動していくという事例はほとんどないと思います。e-dream-s は、国際的なメンバーと国際的な視点を得ることによって地球的な意味で真に公の組織となるのです。

そのようなユニークな団体がユニークで実効性のある活動をする準備が今、整いつつあります。

United in Diversity: 欧州連合を考える

井川 好二



欧州連合(European Union¹)の国旗

「センセ、ヨーロッパってなんどす？」

「ええ？」

「ヨーロッパって？」

「難しい質問やな」

「このごろよう話題になってますやろ、けど、よう分からん思て...」

「ホンマ」

「で、センセ、来はったら、教えてもらおう思て待ってましてん」

「わかった、わかった、けど、まず一杯貰てからや」

最近ヨーロッパのことを教えることがあって、その複雑さに改めて気づかされた。ヨーロッパとはなんだろう？考える取っ掛かりとして、欧州連合(EU: European Union)を考えてみる。

欧州連合には現在27カ国²が参加している。全体の人口は5億人を超え、面積も、445万平方キロ

¹イー-ユー【EU】(European Union)欧州連合。ECの経済統合の深化・拡大に加え、外交・安全保障・司法などの面で政治統合を進めるための組織体。1993年、マーストリヒト条約の発効により成立。欧州委員会・欧州理事会・欧州議会・欧州司法裁判所などをもつ。原加盟国はアイルランド・イギリス・イタリア・オランダ・ギリシア・スペイン・デンマーク・ドイツ・フランス・ベルギー・ポルトガル・ルクセンブルクの12カ国。現在は加盟27カ国(2007)[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

²2007年現在加盟国はアイルランド、イギリス、イタリア、エストニア、オーストリア、オランダ、キプロス、ギリシア、スウェーデン、スペイン、スロバキア、スロベニア、チェコ、デンマーク、ドイツ、ハンガリー、フィンランド、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ポルトガル、マ

メートルと広大である。(文末のTable 2「EU Members」を参照)

EU 27カ国の人口と面積を、他の大国と比較してみると、以下のようになる(Table 1)。人口的には、日本とアメリカを遥かに抜き、面積的にも超大国の規模である。

Table 1. EU's Population & Area: Comparison

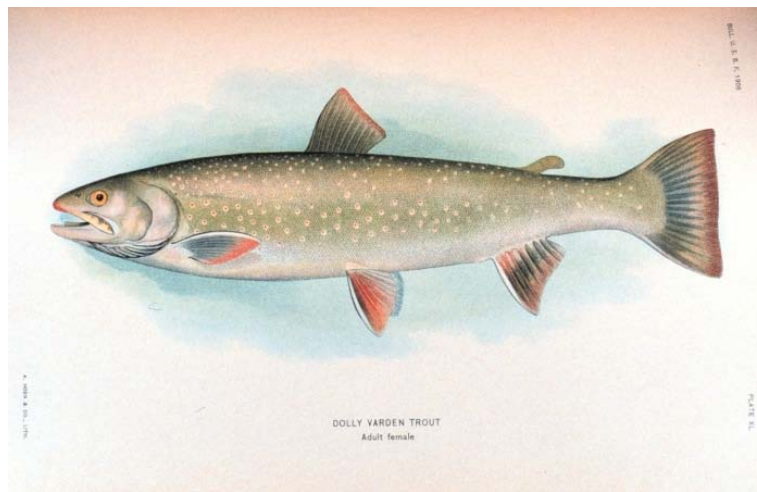
	POPULATION	AREA (KM2)
EU	501,078,836	4,456,304
United States	314,659,000	9,372,615
China	1,345,751,000	9,596,960
Japan	127,333,002	377,944

「岩魚³の塩焼きどす」

「こりゃ、旨そう」

「和歌山から、ええのんが入ったので、板さんが、まず、センセにということで」

「うれし。こうなったら、やっぱり、冷酒にしよ」



イワナ⁴

羽場久美子(2004)⁵によると、欧州連合が加速した大きな理由の一つは、経済的にアメリカやアジアに

ルタ、ラトビア、リトアニア、ルクセンブルク、ルーマニアの 27カ国。(ブリタニカ 2008)

³いわ - な【岩魚】サケ科の硬骨魚。アメマス、ニッコウイワナ、ヤマトイワナ、ゴギの 4 地方群（亜種）に分けられる。本州以北の河川最上流にすむ陸封魚だが、北の地方にすむアメマスには降海するものも多い。ふつう暗緑色の地に多数の小さな白～朱色斑点がある。最大全長 80 センチメートル（ふつう 20～50 センチメートル）。溪流釣りの代表的釣魚。美味。ヤマトイワナの紀伊半島産のものはとくにキリクチと呼ばれる。嘉魚。[株式会社岩波書店 広辞苑第六版]

⁴ http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/4/47/Dolly_Varden_trout.jpg

⁵ 羽場久美子(2004)「拡大ヨーロッパの挑戦—アメリカに並ぶ多元的パワーとなるか」 東京：中公新書。

対抗しうる勢力になろうとしたこと。このことは、ユーロ⁶経済圏として発展を遂げていく中、最近までは一定の成果を収めてきた。しかし、ここに来て失速。ギリシャの財政破綻、スペイン、ポルトガル経済の危機的状況、ハンガリー経済の行き詰まりなど、ユーロ経済圏は今困難な時期を迎えている。

「前は、1ユーロ(€)で、150円とか160円とかでしたやろ」

「そや、えらい高かった」

「おばさんらと、パリへ行かしてもろたときも、大変どした」

「今は、110円きってるわ」

「びっくりします」

欧州統合が進んだ政治的背景には、80年代終わりのソ連の崩壊がある。それによって東西に分割されていたヨーロッパの再統合への機運が高まった、と羽場久美子(2004)は云う。第2次世界大戦後、アメリカの軍事力を中核とするNATO⁷と、ソ連の軍事力を頼みとするワルシャワ条約機構⁸による東西ヨーロッパの分割と冷戦体制が構築された。

ソ連が崩壊すると、東ヨーロッパ諸国は、雪崩をうって西ヨーロッパへと接近をはじめ、次々にEUに加盟した。

「チェコとか、ポーランドとか、ハンガリーとかどすね」

「よう知ってるやん」

「この頃、お客さんも、観光で行ったはりますもん」

「けど、昔、東欧はヨーロッパとはちょっと違う思ってた」

「今は、EUでひとつですか」

「そういうこと。EUのモットーは、”United in Diversity⁹”」

「どういう意味どす？」

「多様性における統一」

「・・・」

「顔かたちはいろいろやけど、心はひとつ、か？」

⁶ ユーロ Euro: ヨーロッパ連合 EU の単一通貨の名称。1995年12月のEU首脳会議で決められた。第1陣の参加を見送ったイギリス、デンマーク、条件を満たせなかったギリシアとスウェーデンを除く11カ国で、資本取引など帳簿上の取引に99年1月から導入され、2002年前半までに一般の流通も開始。(ブリタニカ2008)

⁷ North Atlantic Treaty Organization [the ~] 北大西洋条約機構《1949年の北大西洋条約に基づく集団防衛体制; 本部 Brussels; 加盟国: 米国・カナダ・英国・フランス・イタリア・ベルギー・オランダ・ルクセンブルク・ノルウェー・デンマーク・アイスランド・ポルトガル(以上原加盟国), ギリシア・トルコ(以上52年加盟), 西ドイツ(55年加盟, 現ドイツ), スペイン(82年加盟), ハンガリー・チェコ・ポーランド(以上99年加盟); 略 NATO》.[株式会社研究社 リーダーズ+プラス V2]

⁸ Warsaw Treaty Organization [the ~] ワルシャワ条約機構《1955年Warsawで調印された東欧8か国友好協力相互援助条約, 俗に`ワルシャワ条約'(the Warsaw Pact)に基づく東欧諸国の軍事機構; 91年解体; 構成国: ソ連・アルバニア(68年脱退)・ブルガリア・ハンガリー・東ドイツ(90年脱退)・ポーランド・ルーマニア・チェコスロヴァキア》.[株式会社研究社 リーダーズ+プラス V2]

⁹ 多様性における統一

「へえ」

現在の27カ国に加えて、トルコ¹⁰が加盟を希望している。この国を受け入れるかどうか、「ヨーロッパのアイデンティティ」にとって大きな問題と云われている。

つまり、現在までのヨーロッパの概念は、(1)ギリシャ・ローマの古典の伝統、(2)キリスト教の影響、(3)ゲルマン民族の気質、の3つを受け継ぐことを基盤にする国々の総称ということになっていた。(増田四郎 1967)¹¹

イスラム国であるトルコの加盟は、こうした既存のヨーロッパのアイデンティティを揺るがすものとなるのである。

「けど、よろしおすわ、ヨーロッパはんは」

「ええ？」

「そうかて、お友達ようさんいたはって、楽しそう」

「そやな。日本はどことつながれるんやろ？」

EUやアメリカ合衆国の例を引きながら、Huntington (1993)¹²は、日本の立場の困難さを以下のように説明している。

The European Community rests on the shared foundation of European culture and Western Christianity. The success of the North American Free Trade Area depends on the convergence¹³ now underway of Mexican, Canadian and American cultures.

Japan, in contrast, faces difficulties in creating a comparable economic entity in East Asia because Japan is a society and civilization unique to itself. However strong the trade and investment links Japan may develop with other East Asian countries, its cultural differences with those countries inhibit and perhaps preclude¹⁴ its promoting regional economic integration like that in Europe and North America.

「日本文明」のユニークさが、日本の孤立の原因とは・・・

ヨーロッパのことを考えていても、その考察の行き着く先は、日本。世界経済の中で孤立を深める日本。そこを乗り越える思想性と、組織力が、政治・経済に求められている。

¹⁰ Turkey |' tærkē| a country located on the Anatolian peninsula in western Asia, with a small enclave in southeastern Europe west of Istanbul; pop. 68,893,000; capital, Ankara; language, Turkish (official).(OAD)

¹¹ 増田四郎(1967)「ヨーロッパとは何か」東京：岩波新書。

¹² Huntington, S. (1993, September). The clash of civilizations. *Foreign Affairs*. Retrieved June 25, 2008 from http://www.bintjbeil.com/articles/en/d_huntington.html

¹³収斂《類似の条件によって異文化間に類似の特性が発達すること》[株式会社研究社 リーダーズ＋プラス V2]

¹⁴《あらかじめ》排除する, 除外する (exclude)[株式会社研究社 リーダーズ＋プラス V2]

Table 2. EU Members

	Common name	Accession ¹⁵	Population	Area (km ²)	Capital
1	Belgium	25.Mar.57	10,827,519	30,528	Brussels
2	France	25.Mar.57	64,709,480	674,843	Paris
3	Germany	25.Mar.57	81,757,595	357,050	Berlin
4	Italy	25.Mar.57	60,397,353	301,318	Rome
5	Luxembourg	25.Mar.57	502,207	2,586	Luxembourg
6	Netherlands	25.Mar.57	16,576,800	41,526	Amsterdam
7	Denmark	1.Jan.73	5,547,088	43,094	Copenhagen
8	Ireland	1.Jan.73	4,450,878	70,273	Dublin
9	United Kingdom	1.Jan.73	62,041,708	244,820	London
10	Greece	1.Jan.81	11,125,179	131,990	Athens
11	Portugal	1.Jan.86	10,636,888	92,391	Lisbon
12	Spain	1.Jan.86	46,087,170	506,030	Madrid
13	Austria	1.Jan.95	8,372,930	83,871	Vienna
14	Finland	1.Jan.95	5,350,475	338,145	Helsinki
15	Sweden	1.Jan.95	9,347,899	449,964	Stockholm
16	Cyprus	1.May.04	801,851	9,251	Nicosia
17	Czech Republic	1.May.04	10,512,397	78,866	Prague
18	Estonia	1.May.04	1,340,274	45,226	Tallinn
19	Hungary	1.May.04	10,013,628	93,030	Budapest
20	Latvia	1.May.04	2,248,961	64,589	Riga
21	Lithuania	1.May.04	3,329,227	65,303	Vilnius
22	Malta	1.May.04	416,333	316	Valletta
23	Poland	1.May.04	38,163,895	312,683	Warsaw
24	Slovakia	1.May.04	5,424,057	49,037	Bratislava
25	Slovenia	1.May.04	2,054,119	20,273	Ljubljana
26	Bulgaria	1.Jan.07	7,576,751	110,910	Sofia
27	Romania	1.Jan.07	21,466,174	238,391	Bucharest

¹⁵ 加盟年月日

e-dream-s board meeting

May 2010

Brian Nuspliger

I felt last year's board meeting in Nagoya moved e-dream-s in a new direction. This year it seemed the direction e-dream-s is moving became much clearer. Including me, Sokhom, and the other "international" members changes the organization, but in a way that I feel is in line with the group's original mission. Many teachers across Asia seem quite interested in learning about ACROSS' teacher training programs. More than any specific program or pedagogy though, I think the real strength of the organization lies in its organizational skills. With proven experience in grassroots development, conducting international conferences, and fundraising, e-dream-s has a lot more to offer the world than simply better ways of teaching English. I'm excited to see where the future will take us!



理事会の様子。左から Sopha さん、Sokhom さん、Akhara さん。

To e-dream-s members

Sokhom Leang

My name is LEANG Sokhom, you can call me Sokhom. I am now in year 1 of Master program at Nagoya University in Graduate School of International Development (GSID). My major is Education and Human Resources Development (EHRD).

I was invited by e-dream-s to join their trustee meeting on May 29-30. There, I didn't only meet e-dream-s members, but I also met my Cambodian friends, Akhara (from Hiroshima University) and Sopha (from Hitostubashi University). That was a great opportunity for me to share my idea for Cambodia Project of e-dream-s as well. Beside the academic aspect of the meeting, I also had chance to experience some good food at various restaurants in Osaka, which is the rare opportunity for me.

Finally, I would like to thank e-dream-s and all the members for your kind hospitality and initiative of Cambodia project. I am looking forward to further getting involved in the project and working together with e-dream-s in the future.

Dream is coming true...

Sopha Saran

First of all, I would like to express my sincere gratitude to all e-dream-s members for your great effort and contribution to the improvement of English education in Cambodia. I am very happy now that, after several meetings, we finally came up with a pilot plan – the 'Weekend English Classes' project – as the beginning step of the SEEC (Supporting English Education in Cambodia) Project. It is a regret, however, that not much can be done at the meantime due to the lack of support – willing and committed members – in Cambodia. Yet, it takes time for every dream to be realized; and as long as we do not give up, I believe that dream will come true, one day.

I would like to thank also for the warm welcome and kind hospitality from all members. It is my great honor to have been a part of this organization, to have known all of you, and to have learnt many precious experiences. Thanks to e-Dream-s, I have changed from a pessimistic Cambodian who viewed changes – development in Cambodia – as the impossible into an optimistic young lady who believe that even a small contribution can bring about changes to many lives. I, therefore, am looking forward to contributing as much as I can to help e-dream-s upon my return to Cambodia. So, together, let us make this dream come true.!

Meeting in Osaka

Akhara Ung

First of all, I'd like to express my sincere thank to all e-dream-s members for inviting me to the meeting. I really had a great time for two days in Osaka. That was the first time that I fully enjoyed my time in Japan since I arrived. As a Cambodian, I am very proud to know that there are people on the other side of the world gather together to help providing education to the poor and people who are in need of education in my country. I can't thank you all enough although the plan isn't in action yet. I was also thankful to you to have given me the chance to give a presentation regarding my personal background, studying, and working experiences. I am ready to give a hand if needed in the future. Honestly, I don't have much to say because the meeting was all in Japanese.



カンボジアの英語教育について発表する Akhara さん（中央）。

曇りのち晴れ： わくわく理事会

理事 山田昌子

5月末の理事会の始まりは、私は正直ちょっと憂鬱でした。今年1月の理事会以来カンボジア・プロジェクトは進んでいないし、これからどうなるか先が見えない。その上、私自身にも、提案すべきいいアイデアがない。理事であるにもかかわらず、e-dream-sのためになることが何もできていない。心苦しいスタートでした。

でも、理事会の途中、Sokhomさんの「このプロジェクトと一緒にやりたい」という発言から、会場のムードが変わりました。どんより曇り空に、明るい太陽が輝いた瞬間でした。そして、カンボジア人女性Sokhomさん・Sophaさん・Akharaさん3名より“Weekend English Class Project”¹⁶が提案されました。彼女たちと私たちで、ボランティアを募り、田舎に住むカンボジアの子供たちに英語教育を施そうという案です。「歴史的な瞬間」といっては、大げさかもしれませんが、ACROSSやe-dream-sがやりたかったことやそのパートナーが、ようやく見つかったと、なんだか胸が熱くなるのを感じました。

でも、彼女たちは留学生です。すぐに祖国に帰り、私たちとプロジェクトを進めることはできません。そこで、Sokhomさんが紹介してくれたのが、プノンペンのACE¹⁷のもと英語教師¹⁸---アリゾナ州立大学で言語学を学び、先月M.A.を取得したカンボジア人Rithさんです。e-dream-s通信でも、私とのeメール交換について、何度か紹介させていただきました。彼は、先週帰国し、もと勤務していた学校に戻られたそうです。

また、彼は、Sokhomさんと同じTakmaoという町の出身です。プノンペンから車で約30分。彼は、田舎と都会の間のような町、大学はないが、高校は2つあるそうです。

最初はどうなることか心配でしたが、とても充実した理事会となり、大きな第1歩を踏み出すことができ、うれしい終わりでした。ちょっぴり遠かったカンボジアが近くなり、私の気持ちは高揚していききました。

さて、Rithさんはというと、e-dream-sのカンボジア・プロジェクトについて興味を持ち、カンボジアのために何かしたいと思っておられるようです。先日の彼から来たeメールの一部を紹介します：

I would be more than interested in helping e-dream-s cos it is helping Cambodia. Just let's me what I can do for you. Although I can't promise anything yet but I will try my best with my available time. Sokhom told me about the project but not really in a detail yet. And I told her that I will be happy to help. Let's me know what I can do for you. I will be happy to volunteer as long as it helps Cambodia.

¹⁶ 他の記事もご参照ください。

¹⁷ Australian Center for Education; <http://www.cambodia.idp.com/>

¹⁸ ACEのもと英語教師 Sokhom さんや Sopha さんとも、一緒に勤務されていたようだ。

Rith さんにこの e-メールを引用してもいいかと尋ねると、二つ返事で OK、そして、こんな言葉が付け加えられていました： Hope the project can be started as soon as possible.

いよいよスタートです！

“e-dream-s Standard”

(理事会を終えて)

藤澤 俊之

5月29日(土)30日(日)の両日、本年度の理事会が大阪で開かれた。

メインテーマのひとつは、ここ数年力を入れているカンボジアプロジェクトで、一日目に井川顧問による、カンボジアが現在抱えている諸問題についての、パワーポイントプレゼンテーション、及び質疑応答。二日目には、現在広島に留学されている、Akhara さんのプレゼンテーションが行われた。Akhara さんは、Sokhom さんと Sopha さんの、カンボジアの語学学校“ACE”での元同僚で、広島大学に在籍し研究を進められている。その結果、今回の会議には3人のカンボジア人の方が参加していただけることになった。また今回の会議には、日頃から、e-dream-sの活動だけでなく、アクロスの活動に協力をしていただいている、関西学院大学のブライアン先生も参加していただき、国際色豊かな理事会となった。

初日。井川顧問のプレゼンテーションでは、現在カンボジアが抱えている問題、特に教育が抱えている問題の一部が明らかになり、e-dream-sとして今後どのように関わっていくのかを問われたプレゼンテーションであったと思う。会議終了後、ホテルに戻ると、ブライアン先生と同室であったので、早速、井川顧問のプレゼンテーションの内容について、率直な意見交換をした、もちろん英語で!!(ブライアン先生は流暢に日本語も話されます。)

二日目、Akhara さんの発表、“English Education in Cambodia”と題された、カンボジアの教育事情を、彼女自身の個人的な経歴等も含めて興味深く話をしてくださいました。

その後の行われた、まとめの会議で、「今後の e-dream-s の活動をどう展開していくのか。」という話になり、福岡から参加の塚本さんから、韓国のE C A Pでお世話になった先生方の中にもカンボジアプロジェクトに関心を持ってくださっている方がおられると言う話があり、“日本とカンボジア”と言う、構図だけではなく、「日本とカンボジアと韓国(アジアの国々)」という考え方も視野に入れてはという提案がなされたと思う。

ブライアン先生からは、“E C A Pカンボジア”を開いてはどうか、CamTESOL とも、もっと関連付けてはどうか、「単独の活動ではなく、多くの人や活動を巻き込む“movement”として考えていけば。」というような主旨の発言をいただいたような気がする。

そして何よりも大きな提案は、日本語だけでなく、英語でも広報媒体をしっかりと整理すること。まずは、ホームページ、広報用のパンフレット等の整理になると思う。これは、これからよりグローバルな活動を目指す、e-dream-s としては、必須のことだろう。

今回の会議を通して感じたことは、参加者が、日本、カンボジア、アメリカとなり、会議の言語が、共通語である英語で統一されつつあること。韓国の方が参加してくれても、状況は変わらぬはずであ

る。e-dream-s の活動においては、E S L (English As a Second Language)のような状況が達成されつつあるし、達成されなければならないと思う。

人は、ある状況にほうりこまれることによって、飛躍的にその能力が発揮されることがある。そのような状況下（英語でコミュニケーションを取っていくこと）に置かれることが必然となった今、会員全員で臆することなく、しっかりと目標（カンボジアの教育に何らかの貢献をすること）を見つめて、英語で会議や広報活動を行い、アジアやその他の国々の人々とも連携していけたらと思う。そこから出発すれば、会としての成長もおのずと計れるものと考えている。「手段としての英語」を今ほど感じ活動していける機会是他にないのではないか。なんとすばらしい機会に恵まれたことか。いろいろな国から出席者があり、英語でああでもないこうでもない話し合える状況が始まったのが今回の会議だと思う。これからはこの日の会議の進め方や、いろんな国々からの参加が、“**e-dream-s standard**”となり、英語で会議をするのは当たり前、「大切なのは、**what** と **how!!**」（どこかで聞いたせりふ!？）とか言える日がついそこまできてきているような気がしている。

ただし忘れてならないのは、私達が前面に出るのではなく、カンボジアの人々と共に、何ができるかを考えていくことが大切と言うこと。これからは、カンボジアの人も、アメリカの人も、東京、福岡、広島の人も、同じ e-dream-s 会員として活動していくと言うこと！

これからますます、e-dream-s の活動が面白くなっていく。



上：一日目の理事会の様子

右：一日目夕食会の様子



多様性を受け入れること

塚本美紀

私の勤務する学校は定時制の単位制高等学校で、朝から晩まで、さまざまな人が登校して学んでいる。この時期になると、教科書会社から教科書の見本がたくさん送られてくるが、大判で字も大きく絵がたくさん掲載された教科書から、コンパクトで字の小さい教科書までさまざまなレベルに対応できる見本が届く。生徒に関しては、身体的な障害や学習障害、あるいはさまざまな特徴を抱える生徒が多いので、生徒一人ひとりにカルテを作り、「右耳が聞こえないので、教室の席は黒板に向かって右側に」とか、「口頭での指示だけでなく、文字での指示も必要」とか、「追い詰めるような言い方はしないように」などと細かな注意点を記載し、定期的に関われている会議でカルテの内容を確認したり、各生徒について効果的な指導法を話し合ったりしている。

多様な生徒に対応するためには、教員側の負担も大きい。私の学校には約740名の生徒が在籍しているが、どれひとつとして同じ時間割はない。それぞれの時間割が、生徒の能力と進路希望にあい、その上、学習指導要領の要件を満たしているのかを確認するのは、多くの時間とエネルギーのかかる作業だ。一つミスで生徒が卒業できなくなる可能性もあるので、神経が磨り減る作業でもある。「ここまで生徒のわがままにつきあわなければいけないのか」と言いたくなる時もある。もちろん生徒のわがままばかりではないことはわかっているが、忙しくなってくると愚痴の一つも言いたくなる。とはいえ、社会の変化に伴い、子供や親のニーズも変化し、学校はその変化を受け入れざるを得ない。そして、多くの生徒がこのシステムで恩恵を受けていることは間違いない。不登校で英語の授業を受けた経験がなく、高校に入学してアルファベットから始め、高校3年生で英検準2級に合格した生徒もいれば、「学問をしたい」という理由で工業高校をやめ、本校に入学後はマイペースで勉強し、京都大学に入学した生徒もいる。また、地元や東京での芸能生活と学校生活のバランスをとりながら、紅白出場の夢を果たし、高校を卒業していった生徒もいる。それぞれがたくましく生きている姿を見るのは気持ちいいし、こっちまで元気になる。そして生徒それぞれの生き方は、私に新しい視点を与えてくれる。

多様性を受け入れることは、面倒なプロセスもあるが、それは新しい世界を経験することにつながっていく。このことは、日本の中だけでなく、世界を視野に入れて考えても同じことだと思う。先日、大阪で行われた理事会には、ソコムとソパだけでなく、二人の友人でこの春から広島大学の大学院で学んでいるアカラも参加してくれた。3人が参加することで、会議での言語が時々、自然に英語に変わっていた。日本にいながら、自然に英語を話しているのも面白い経験だ。また、彼女たちのカンボジアでの経験や日本に来てからの経験を聞くのも、変わりつつある世界を別の視点から捉えることができ面白い。とはいえ、「異なるもの」と接するのは面倒なことでもある。中華料理店に入ったとき、ソコムは真っ先に「私、麻婆豆腐！それに白いご飯ね。」と言った。この場合、みんなでいろいろ頼んでシェアするのか、定食や麺類やチャーハンなどをそれぞれ頼むのかということ、皆の様子を伺って決めたり、年長者の意見をたてたりするのだと説明するのは面倒だ。といて、この面倒くささを逃げていたのでは、多様性を受け入れ、新しい経験をつむことはできない。外国語を教える教師として、その面倒くささをきちんと引き受け、さらにその楽しさを享受している姿を、しっかり示せるようになりたいものだと思う。

編集後記:理事会の熱気をお伝えすることができたでしょうか?人との繋がりがプロジェクトを発展させていくことを強く感じた2日間でした。(岡田かおる)